

早池峰神楽の技法

国際基督教大学 近藤洋子

舞踊指導者として民俗舞踊実践研究を開始したのは1968年、1970年に体育実技「日本民俗舞踊」授業を開講した。取り上げた民俗舞踊は北アイヌ古式舞踊から南は八重山諸島の舞踊におよんだ。実践研究成果の一端を「早池峰神楽の技法」として実演を含めて発表したい。

民俗学者柳田國男の「遠野物語」遠野地方の信仰の対象早池峰山に古くから山伏が神事・修行・布教の為に舞ったといわれる神楽が早池峰神楽である。舞踊性の最も高い神楽の一つとして評価され、国内だけでなく海外からも注目されている。門外不出、一子相伝のこの芸能も時代と共に其の伝承形態が変化し、幸い33年間のお付き合いで10数曲（鳥舞（二人、四人）、翁舞、三番叟、八幡舞、天女舞、鞍馬、天降り舞、天照五穀、水無月、注め切り、普将、山の神、狂言 猿引き、権現舞）の演目を楽しませていただいた。地元以外の者には無理と言われる早池峰神楽を楽しめた理由は、技法習得のポイントに謎が隠されている。

早池峰神楽修得手順

基本の舞

1. 三番叟（荒舞基本、黒翁面、千早を着た一人舞：実演）①かなりハードな舞であるが覚えやすい②腰の柔軟性・体力をつける（＝力を抜かないと舞えないと教える）③シンプルな両足跳び、片足跳び・リズムも単純な繰り返し

2. 鳥舞（女舞基本、鳥兜を付け面無二人舞：実演）①覚えるのが非常に難しい②三番叟ほど体力はいらない③複雑なリズムを大きく移動せずにこなさなければならない④三番叟とは異なる腰使いをトレーニングする⑤他者との呼吸合わせが必要とされる⑥幕出しは自力で出る

中級から上級へと進む

3. 八幡舞（鳥兜、面無、諸肌脱、弓矢持参二人舞：実演）①軽快で切れ味鋭い回転を行い、神楽のかっこよさ、舞う楽しさを教えてくれる②舞う時間が長くなり持久性が養われる③後半クライマックスで「八幡大神弓矢をつがえ」と歌いながら舞う

4. くずし（天照五穀を例として実演。面、千早を付け神々として登場。舎文の後、面、千早を取り外した時は奉納芸となる。四人が勇壮に舞う）①神楽の“いとこどり”の振りばかり……切れ味鋭くスピーディーでダイナミック②刀の使い方を身に付ける＝危険が伴う

5. ねり（面をつけ一人舞う場が多い。山の神く神楽を舞う者の最高目標の舞）を例として実演）

技法修得のポイント

技法積み上げは地元伝承者の人々と同じ手順を踏んでいるが、異なる視点・取り組みを行った。地元と同じように舞う目標は持ちつつ……

1. 動きの原則の視点

「自然かつ合理的」

「最小限のエネルギーで最大の効果をあげる」

①まず身体を緩め②動きのエネルギーを貯え③エネルギーは、大地からもらう。足の裏から……足の裏は、柔軟でなければならない・足首関節を柔らかく、足の裏全部を使用する

④大地からもらったエネルギーは身体の中心腰に吸い上げ、全身へと流す⑤末端部（・上肢・重心のかかっている下肢・頭部）はバランスをとり動きをリードする。

⑥中心軸がしなやかでしっかりし、地球の重力線と一致していなければならない。⑦伝統の「振り（または「かたち」）」を覚えたらその「振り・かたち」のなかで・自由に・伸び伸びと舞えるように目指す。

2. 究極の目標は「臨機応変に対処できる」「にわかに対応できる」ことである。

3. 積み重ね・一汗一汗がものを言う・大器晩成は本当である…を重視する。

結論

三番叟で体力をつけ、鳥舞でかなりのテクニクを身に付けることができると、其の実力で八幡舞へと挑戦が可能になり、八幡舞が仕上がると、神楽の醍醐味が覗け、加速度的に上級演目へと進んで行く。「くずし」を仕上げる事が出来ると一人前で、「ねり」と呼ばれるいわばソロダンサーとしての活躍が出来、より上級の演目へと進みやがて皆の憧れ「山の神」への挑戦許可が師匠より下りる。そこまでに至る大切なポイントは「派手に見える末端に目を奪われない」ことである。・どちらの足に重心があるか・腰はどうか・中心軸はしっかりしているか……に注目すること・余分な力を抜く事。このことが早池峰神楽修得のポイントである。

おどりは心が大切というメンタルな問題は今後の研究で明らかにしてゆきたい。